

・ 1 つ目の選択した講義資料

～聞いてみよう！あなたの知らない土の世界—放射性セシウムに対する土の働き～

・ 2 つ目の選択した講義資料

～福島県飯舘村の除染に尽カースマート農業で再生へ～

〈感想、質問など〉

まずはじめに土壌の研究分野は多種多様にわたることについて、感じたことをまとめる。私は武藤教授の研究室に在籍していることもあり、主に土壌物理学を中心に学習、研究すべきだと考えていたが、土の成り立ちや、土壌中の生物性、化学性について全く考慮できていなかった。土壌物理学以外の学問を学ぶことで土壌についての知見が広がり、土の考え方が多用になるはずである。土壌物理学だけでなく土壌全般の学問にはじめは手をつけてみようと感じた。

また、講義や記事にもあった通り、2011 年に発生した東京電力福島第一原子力発電所によって福島県の内陸部にある飯舘村にも放射性物質が予想外に風に乗っていき、放射性セシウムが土壌表面上に付着していた。これは原子力発電所が遠い存在である私たちが住む地域にも放射性物質が運ばれてくる可能性も大いにあった事である。風の方向が運悪く大陸側であれば、放射性物質は広範囲に影響を及ぼしてくることに恐怖を覚えた。ここで風が海洋側に流れていれば今度は海洋が汚染されるのだろうか。汚染はするが波や海水の拡散運動によって放射性物質は希釈されてすぐ安全になるのであろうか。こうやって考えると海洋よりも大陸、すなわち土壌中に放射性物質が落下してくる方が明らかにやっかいなことは容易にわかる。この土壌中の除染方法は多岐にわたることが講義中でわかった。やはりこうやって一通り除染の仕方を見てみると、凍土を削り出す方法が簡単でコストもかからない方法であると考えさせられる。これは経済的にも村を助け出している一因だなと感じる。しかし、土を削って放射性セシウムを除去してもその後にまた元の肥沃な土壌にしなければ、元通りにしたとはいえない。除染後の事を考えることを我々は忘れがちだが、復興するという観点から考えればこのことも重要視する必要がある。復興とは、元通りの状態に戻すことに加えてさらに、経済的にも住民の情緒も盛り上げることが大切だとこれらの記事を読んで考えた。その復興の一環に農業の「見える化」、すなわち農業の遠隔モニタリングシステムの構築や灌漑施設の遠隔操作、若年層の農業参画を目的として学習のための合宿所や学習塾の設置に取り組んでいるという。いまは避難のために村を離れている人々の帰村を促すと同時に飯舘村の農業を盛り上げようとしている。ここまでいって初めて復興したといえるのだと感じた。復興の観点からいうと、岩手県の沿岸部もまだまだ復興途上だと考えさせられる。大震災によって引き起こされた津波によって町一帯の住居や様々な

施設が流された。それらの瓦礫は撤去できたものの、いまだその周辺には野原が広がっているところが多い。昔の光景を知っている人がそれを実際に見ると顕著で、まだ津波の名残があるなど感じさせられる。しかしこれらはプラスにも捉えることも可能で、震災によって言わばリセットされた地帯にまた新たな事業を展開できる可能性も秘めている。例えばその一体に魚介類や海藻、貝などの海産物を養殖できる施設を設置できればそこで研究する人、働く人とその家族などあらゆる業種の人を招致することができる。そうなれば経済も回復し、新たな特産物も生産できる。いまはまだ岩手県沿岸部は復興の途中であるがいずれは飯舘村のように新たな可能性を模索してそれを実現することができればより、その町一帯を盛り上げることができると今回の記事を読んで強く確信できた。